

### ジョイスの時代のダブリン(10)

YUKI, Hideo / 結城, 英雄

---

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

61

(開始ページ / Start Page)

73

(終了ページ / End Page)

85

(発行年 / Year)

2010-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007067>

## ジョイスの時代のダブリン(10)

結 城 英 雄

### 文 学

#### スティーヴンと文化民族主義運動

十九世紀末から二十世紀初頭にかけて、アイルランドでは、イギリスの植民地支配に対抗して、文化民族主義の運動が起こった。マイケル・キューサクらのゲール体育協会（1884）、ダグラス・ハイドらのゲール語同盟（1893）、W. B. イェイツらの国民文芸協会（1892）など多岐にわたるが、いずれの運動も、イギリス文化とは異なる、アイルランド独自の文化の確立を目指していた。アイルランド人のアイデンティティは、アイルランド文化を基礎として形成されなければならない——この考えではいずれの運動も変るものではなかった。

これらの運動は、自治権獲得運動の指導者、チャールズ・スチュアート・パーネル失脚後の「政治的な空白」を埋め、国民に愛国心を再燃させた。そして1916年の復活祭蜂起から1922年の自由国成立へと至る、一連の独立運動の原動力になる。とりわけ文学者たちの運動には目覚ましいものがあった。この時代に活躍したW. B. イェイツ、G. ムーア、J. M. シング、あるいはオスカー・ワイルド、G. B. ショー、J. ジョイスなど、世界的な文学者の名を挙げるだけで十分であろう（Lyons）。彼らの豊饒な文学活動を評して、「アイルランド文学ルネサンス」と呼ぶこともある。

その後、文化民族主義の運動は次第に党派色を帯始め、アイルランドのアイデンティティをめぐる議論も、狭隘なものになっていった。この事情を最も雄弁に語っているのが、『アイルランド人のアイルランド哲学』（1905）のデニス・モーランである。彼が力説したのは、アイルランドがイギリスから政治的にも、文化的にも、経済的にも完全な独立を達成し、自らの言語、慣習、文学を持つ自治の国家としての地位を獲得することであった。「二つの文明の戦い」と題されたその最終章では、イギリス人は「よそ者」の意の「ゴール」と称され、土着のカトリック教徒である「ゲール」と区別された。イギリス人がアイルランド人を「他者化」することによって自らの卓越性を賛美してきたことに対して、モーランは、そのイギリス支配の力学を逆転させ、アイルランド人本来のアイデンティティを構築しようとしたのである。

イェイツ、ダグラス・ハイド、レイディ・グレゴリーたちプロテスタント系の文学者たちは、事態の展開に居心地の悪さを感じ、この文化民族主義の運動から離れることになる。結局、彼らはイギリス系

アイルランド人という出自に折合いをつけられなかったのだ。イギリスから解放された文学の創造を試みながらも、土着のカトリックから、そのアイルランド性を否定されたのである。彼らが創造したアイルランドは現実から遊離したロマンティックな夢想と思われていた。ブルームのような一般人でさえも、「文学的天上のな連中なんだ。夢みたいな、雲みたいな、象徴みたいな。審美的な人間なんだ」(8.543)、と彼らの運動に不信感を表明している。事実、イエイツたちの文学運動も、1920年代には終息することになる。

こうした状況を見すえながら、スティーヴンは国立図書館でシェイクスピア論を展開する。彼の目的はダブリンの文学界で自分の立場を確立することであるが、その議論は、聞き手たちイギリス系アイルランド人への対抗から、カトリック側からのシェイクスピア論になっている。彼の論じるシェイクスピアは、偉大な文学者であるのみならず、アイルランド文化に〈ハイジャック〉された存在でもある。本稿ではアイルランド文学ルネサンスの流れをたどりながら、スティーヴンを取り巻く文学事情を明らかにしておきたい。

### ゲール体育協会・ゲール語同盟

イギリスの植民地化はスポーツの領域にまで広がっていた。そのような状況を憂慮して、1884年11月1日、ゲール体育協会が設立された。スポーツ選手のモーリス・デヴィンとマイケル・キューサックをそれぞれ会長と書記とし、政治家のパネルやマイケル・ダヴィットの支持の下、さらにカッシェルの大司教クロークが後援者になった(Collins)。ダブリンにあるアイルランド・スポーツの競技場、「クローク・パーク」は大司教の名にちなむ。

ゲール体育協会は、ハーリング、フットボール、ハンドボールなど、アイルランド古代のスポーツの復興を目的とした。この協会はスポーツの組織に過ぎなかったが、それでも民族主義を煽動するうえで大きな役割を果たした。地域単位の組織で試合を行なうことで故郷への誇りを育て、また外国のスポーツへの敵意を煽って反英感情を吹き込み、最終的にはアイルランド人の愛国心の復活に成功したのである(Lyons)。スティーヴンの通う、カトリックの大学ユニヴァーシティ・コレッジでも、ハンドボールが行なわれている。また彼の友人のデイヴィンも、ハーリングの試合を見学するために、遠方まで出かけている(『若い芸術家の肖像』)。この運動に共鳴する国民も数多かったのである。

ゲール体育協会は民族主義的色彩が濃厚な組織で、アイルランド共和兄弟団(IRB)の拠点にもなっていた。1916年以降の独立運動で活躍する戦士も、ここで訓練されたと言われている。ジョイスが描く「市民」(第十二挿話)と称される人物は、まさしくマイケル・キューサックの戯画であり、狂信的な民族主義者のイメージが投影されている。イギリス当局もこの組織を警戒し、メンバーのブラックリストを作成し、フィーニックス公園での競技を禁止したこともある(12.857)。だがゲール体育協会は、パネルの密通事件をめぐって分裂した後、1900年ごろには政治とスポーツを切り離し、少なくとも表面上は中立の組織として発展していった。

もちろんスポーツだけでは民族主義は育たない。民族主義を高揚させるにはその思想基盤が必要であ

る。その手助けになったのがゲール語同盟である。1893年7月31日、ダグラス・ハイド、イオハン・マクネイル、ユージーン・オグロニー神父らによって組織された。その目的は、(1) アイルランド国民の言語としてのゲール語を守り、口語として普及させること、そして(2) 現存するゲール語文学を刊行し、ゲール語によりアイルランドの現代文学を陶冶することであった。ゲール語同盟は政治や宗教の相違を越えた運動として出発し、アイルランドの産業の促進に力を入れ、女性も同盟員に迎え入れるなど、大衆を巻き込んでいった(Lyons)。

実際、ダグラス・ハイドは、『初期ゲール語文学物語』や『コナハトの愛の歌』(1895)などを出版して大衆を啓蒙した。イオハン・マクネイルも、アイルランドの歴史と文学の専門家で、ゲール語同盟の最初の提案者である。そしてユージーン・オグロニー神父は、メイヌース神学校のゲール語の教授であり、基本的な学習書『簡便アイルランド語学習』(1897)を著し、人々のゲール語学習に寄与した。それ以前にも、ゲール語の研究者が国内外にいたが、いずれも研究対象としてゲール語に取り組んでいたに過ぎない。ハイドたちの新たな著作はまさしく「啓蒙書」の名に値した。

当時、ゲール語はアイルランド西部のごく一部で話されていたに過ぎなかった。たとえば、スティーヴンたちのマーテロ塔を訪れるミルク売りの老婆は、イギリス人のヘインズの話すゲール語をゲール語として聞き分けることすらできない(第一挿話)。大多数のアイルランド人にとり、ゲール語は死語に等しかったのである。スティーヴンは、「ぼくの祖先たちは自分たちの国語を捨てて別の国語を身につけた」(『若い芸術家の肖像』)、と友人にゲール語同盟に対する不信感を語ったことがある。彼の念頭にあったのは、歴史修復の不可能性であり、アイルランド文化の断片化についての認識である。ハイドたちもこの現実をわきまえていた。奇跡でも起きないかぎり、ゲール語が一夜にして復活できるわけではない。だからこそ彼らは、英語によるアイルランド文学、たとえばトマス・ムーアやデイヴィスなどのテキストを読むよう、推奨していたのである。

その一方で、英語は商業、政治、法律、新聞、雑誌、さらには説教壇上の言語であり、英語の使用が社会のステータスになっていた。そうした趨勢に拍車をかけたのが、1834年の国民学校の設立である。英語で授業がなされるようになったのだ。また1845年の西部での大飢饉がゲール語に壊滅的な影響を与えていた。大飢饉当時、約800万人の人口の半数の約400万人がゲール語を話せたのに、その6年後には、ゲール語を話せる人は四分の一以下にまで減少し、ゲール語しか話せない人はわずか5パーセントになっている。さらに、産業革命の影響を受け、地方に英語が浸透していたことも、ゲール語人口の減少と無縁ではない。

にもかかわらず、ゲール語同盟の影響は大きかった。当初は緩慢であったこの運動も、1908年には全国に600もの支部を有するまでになっていた。『ダブリンの市民』を取りあげてもいい。「母」では、ミス・カーニーたちが教会で別れるとき、片言ながらゲール語を使用している。また「死者たち」のクリスマス・パーティでは、ミス・アイヴァーズが慎ましやかなアイルランド様式の服装と装飾品を身にまとい、同僚のゲイブリエルをゲール語の話されているアラン島に誘い、さりげなくゲール語で別れを告げている。同じく『若い芸術家の肖像』でも、ゲール語同盟の講習会が開かれ、スティーヴンの同級生

の民族主義者デイヴィンや、スティーヴンが心を寄せている恋人エマもそれに参加している。さらに、『ユリシーズ』の第十二挿話では、民族主義者の「市民」が、犬を相手に、時折ゲール語を会話にすべり込ませている。『フィネガンズ・ウェイク』でも、時代状況のモザイクとしてゲール語が頻出している。ゲール語熱はまたたく間に伝播していた。

こうした社会状況を鑑み、政治的に中立のゲール語同盟も、その姿勢を堅持できなくなる。言語の復活と国民性は不可分の問題であった。ゲール語をめぐる議論は喧しかった。J. F. テイラーは「法喪失者の言語」(1901)と称してゲール語の復活を弁護し(第七挿話)、民族主義者たちは「国語の問題には経済問題以上の比重を置くべきです」(8.466)と論じ、市議会でもゲール復活問題をめぐる議論が行なわれていた(12.1180)。こうして初等学校や中等学校の科目にゲール語が導入されただけではない。1909年に国立大学が設立されたときには、入学の必修科目にもなった。そして1915年、同盟の第一の目的はアイルランドの独立であるという議案が可決された。その結果、これまで通り政治を排した運動を支持するハイドが引退し、アイルランドの独立を説く民族主義者のパトリック・ヘンリー・ピアスが、議長に就任することになった。

ジョイスは、アイルランドでは郵便配達員が読めないような言語の復興がある、とトリエステでの講演でゲール語同盟を揶揄している。彼の発言が正しいかどうかは、意見の分かれるところであるが、ジョイスも2年余りゲール語を学習していたことは想起しておきたい。その後のアイルランドは、ゲール語を公用語として宣言するが、多文化社会の到来と相まって、いまだに英語が国民の言語となっている。

### アイルランド文学ルネサンス

一方、W. B. イェイツらは、1891年にロンドンでアイルランド文芸協会を、さらに翌1892年にはダブリンでアイルランド国民文芸協会を結成した。ダグラス・ハイドの「アイルランドの脱イギリス化の必要性」という、同年9月の講演にも明らかなように、彼らはアイルランドの古い慣習や文化の復興と維持を説き、また外国の影響を受けない英語による独自のアイルランド文学の発展を目指した。英語によるゲール語同盟の目的の実践である。だが残念ながら、その影響力は限られていた。ゲール体育協会やゲール語同盟がカトリック主体であったのに対し、アイルランド文芸協会はプロテスタントが主体であったことによる。

イェイツたちの運動の先駆者としては、『アイルランド史——英雄時代』(1878)のスタンディッシュ・ジェームズ・オグレイディがいた。その前には『アイルランド歌曲集』(1807-34)のトマス・ムーア、翻案した詩「黒髪のロザリー」(1847)で著名なジョン・クラレンス・マンガン、『西ゲール人の歌』(1865)、『コンガル』(1872)、『ディアドラ』(1880)のサミュエル・ファーガソン、さらに『妖精たち』(1895年編纂)のウィリアム・アリンガムがいた。彼らはアイルランドの神話や伝説を再説してみせ、イェイツやハイドたちも、IRBの元戦士であるJ. B. オリアリーに導かれ、アイルランド文化の中に創作や政治の潜在力を認めることになった。イェイツの詩「1913年9月」では、「ロマンティックなアイルランドは減んで/オリアリーとともに墓の下」という言葉が繰り返され、オリアリーに寄せる哀悼とともに、物質主

義に溺れる大衆への憎悪が込められている。

イエイツらの運動には、ジョージ・ウィリアム・ラッセル、ジョン・エグリントン、レイディ・グレゴリー、ジョン・ミリントン・シングなど同世代の作家とともに、パードリック・コラム、ジェイムズ・スターキー、シェイマス・オサリヴァン、オリヴァー・セント・ジョン・ゴータティ、ジェイムズ・ステイーヴンズなどの若手も群がった。イエイツたちの運動の手本としては、1840年代に活躍した、T. O. デイヴィス、C. G. ダッフイ、J. ミッチェル、J. F. ローラーたち「青年アイルランド党」があった。彼らは機関誌『ネイション』を発行し、党派、宗派、階級を越えアイルランドの自由を標榜する幅広い民族運動を展開した。イエイツたちの運動もその延長線上に立つが、「青年アイルランド党」とは異なり、文学を政治に奉仕させる意図はなかった。アイルランドの民族主義を高揚させながらも、普遍的な文学の創造をその目標に掲げたのである。ジョン・エグリントンが指摘しているように、イエイツたちは「脱デイヴィス化」から出発することになったのである。そして規模においても、影響力においても、1840年代の運動とは比較にならなかった。

そうした文学者たちのことを「オカルト信者連」と誹謗し、さらにラッセルを神秘家にまつりあげ、ラッセル愛用の「オパール」や「ひめやか」という言葉を模倣する垂流詩人を称し、「オパールひめやか詩人ども」(7.783)と皮肉の人もいた。しかし、アイルランド文学ルネサンスは、神智学と密接に関わり、その思想を基礎に発展していったのだ。指導者レナ・ベトロヴァナ・ブラヴァツキー(1831-1891)の『ヴェールをぬいだイシス』(1877)の影響の下、1886年、ラッセル、エグリントン、ジョン・オリアーらが、ダブリン神智学協会を結成した。そしてロンドンに在住していたイエイツも、同じくその地の神智学協会に加入した。神智学は移ろい霧散する物質世界の中で、精神世界の意味を模索するのに役立った。またそのメシア思想を通して革命という夢も育んでくれた。

メシア思想は被抑圧者たちの間に生まれる。したがって、イエイツたちも、デイヴィス、マンガン、ファーガスンたちにその思想を嗅ぎつけ、自らをメシア到来の先触れである洗礼者ヨハネになぞらえていた。パーネルの失脚はそうした願望を一層強めた。皮肉にも、イギリスの文学者マシュー・アーノルドが、『ケルト文学研究について』(1867)でケルトの精神文化を称揚し、イエイツたちの運動に拠り所を与えていた。さらに、アイルランドをエジプトの支配下で苦しむユダヤ人、郷里を渴望するオデュッセウス、民を救出するジークフリートにたとえる類推思考も広まっていた。ローマ人やイギリス人の物質文化を否定し、ユダヤ人やアイルランド人の精神文化を賛美とするのも、こうした背景による(Howarth)。ちなみに、ジェイムズ・ジョイス、エズラ・パウンド、T. S. エリオット、ウィンダム・ルイスといったモダニストの文学観にも、神智学は大きな影響を与えている。

アイルランド文学ルネサンスは他国からも注目された。マーテロ塔に同居しているマリガンの友人のイギリス人ヘインズも、イエイツたちの運動に関心を示し、アイルランドにやってきた。またアメリカでもアイルランドの文学運動を見守っている人々がいたらしく、状況を観察するために、「ヤンキーの訪問客」(7.785)がダブリンにやってきている。文学の中心はロンドンからダブリンに移ったという、ジョージ・ムーアの言葉には自信さえうかがえる。当時、アイルランド文学とかイギリス文学といった区別

はなく、文学はすべて「英文学」という名の下にロンドンの文壇により評価されていた。したがって、ダブリンはロンドンの知的「戻り水」とさえ思われていたのである (Kelly)。

出版事情も幸いしていた。1801年のイギリスとの連合の結果、イギリスの著作権法が適用され、紙の輸入に関税がかけられるようになり、多くの出版業者がアメリカやイギリスに移民してしまっていた。それでも、アイルランド文学ルネサンスに見合う出版社も設立されたのである。その一つはイエイツの妹が1903年に設立した小印刷所、ダン・エマー・プレス (1908年にクアラ・プレスと改名) である。イエイツの『七つの森にて』(1.367) や、ダグラス・ハイドの『コナハトの愛の歌』(9.94) もここで出版された。そしてもう一つ忘れられないのが、ドーソン通りのモーンスル社である。1905年、ジョージ・ロバーツらによって設立された。ジョイスは『ダブリンの市民』出版契約をめぐりロバートと決裂したためか、短篇「小さな雲」で彼を風刺している。それでもこの出版社がアイルランドの出版物に果たした役割は重要である。それ以前においては、M. H. ギルやジェイムズ・ダフィらが出版を手がけていたくらいである。

アイルランド文学ルネサンスの中心人物、イエイツ、ハイド、レイディ・グレゴリー、シング、ムーア、マーチンらには、共通の特徴がある。その一つは彼らの社会的背景である。シングをのぞき彼らのほとんどがアイルランドの西部出身であり、またイエイツ以外はいずれも地主階級に属している。これは彼らがアイルランドの英雄物語や民話に容易に接することができ、また彼らの素材が農民であることの説明になる。イエイツに賛同する文学者の一人、ジョージ・ラッセルが、「世界を革命に巻きこむ運動は、山裾で暮す農夫の心の夢やヴィジョンから生れる」(9.104)、と語っているように、彼らは農民を理想化していたのである。もう一つの共通する特徴は、彼らのほとんどがイギリス系アイルランド人のプロテスタントであったことである。したがって、アイルランドの歴史が展開する中で、自分たちの既得の地位の崩壊を予感し、自らのアイデンティティの復位を謀ろうとしたのかもしれない。彼らのほとんどが連合支持の政治姿勢をとっていた。

こうした彼らの共通の特徴は運動そのものを容易にした。短期間で一大勢力へと発展したのは、気心の知れた仲間であったところが大きい。だが、そうした特徴が彼らの運動に色々な問題を突きつけた。(1) イギリス系アイルランド人であるため、彼らが啓蒙しようとしていたカトリックの中流階級から不信感で迎えられたこと、(2) アイルランド文学を説きながらも、普遍的な文学観を持ち、しかも英語で表現したため、民族主義との関連を問われたこと。民族主義者たちが地域に執着したのとは対照的に、イエイツたちは普遍的な文学を目指していたのである。対立は必然的であった。それは特に演劇活動において明らかである。

### アビー劇場

イエイツは、アイルランド文芸協会を結成して間もなくの1898年末、レイディ・グレゴリーやエドワード・マーティンらとともに、アイルランド文芸劇場を組織する。そして1899年、エンシェント音楽堂でイエイツの『キャスリーン伯爵夫人』とマーチンの『ヒースの原野』を上演した。また1902年には、

クラレンドン通りの聖テレサ・ホールで、イエイツの『キャスリーン・ニ・フーリハン』とジョージ・ラッセルの『ディアドラ』も上演した。さらに1902年、イエイツたちはフェイ兄弟のアイランド演劇協会と合流してアイランド国民演劇協会を結成し、1903年にシングの『谷間の陰』を上演した。こうして1904年、イギリス人女性のアニー・E. F. ホーニマンの財政援助を受けて、アビー劇場を設立した。いよいよ本格的な演劇活動を始めることになる。

もちろんアビー劇場は1904年6月にはまだ出来ていない。マリガンがヘインズを案内するのは、アビー通り27番地の「機械工会館」(9.1130)に建設中のアビー劇場である。「アビー」(修道院)という名前からの連想であろうか、マリガンは「坊主どもの股ぐらの汗の臭いがすらあ」(9.1131)と皮肉を言う。俳優としてはモード・ゴンたち「エリンの娘たち」(9.1192)も活躍した。客席562の小規模の劇場で、開館は1904年12月27日であった。開館当日には、イエイツの『バーリヤの海岸にて』とグレゴリーの『ニュースを広め』が上演され、好評を博した。

イエイツたちの演劇活動は波乱に富んでいた。とりわけ彼の『キャスリーン・ニ・フーリハン』は喝采を博した。モード・ゴン扮する貧しい老婆が、結婚を明日にひかえた若者、マイケル・ギレインを反英蜂起へと駆り立てる場面は、観衆に強烈な印象を与えた。この劇が1916年の復活祭の原動力になったと言われている。後年のイエイツは、詩「人と罅」(1939)で、「あのわたしの劇がいくにんかの男をイギリスの銃弾へと送り出さなかつただろうか?」、と述懐している。

その他にも民族主義的なテーマの劇が色々上演された。特に好まれたのはケルト神話のディアドラで、ジョージ・ラッセル、イエイツ、シング、ジェームズ・スティーヴンズなどが題材として使用している。悲劇的な生を忍ぶデアドラは、貧しい老婆と同様、アイランドの表象である。あるいはクーフリンも、オグレイディの『アイランド史——英雄時代』の影響により、メシアとしてのイメージが定着していた。さらに、1803年の蜂起の首謀者ローバート・エメットも、蜂起百年祭を迎え、格好の素材となっていたようだ(Innes)。これらの素材のうちでも、イエイツがとりわけ好んだのはクーフリン神話で、日本の能に倣った『鷹の井戸』(1916)を手始めに、その想像力を刺激していた。

にもかかわらず、1899年5月8日にはイエイツの『キャスリーン伯爵夫人』が、また1903年と1907年にはシングの『谷間の陰』と『西国のプレーボーイ』が、それぞれ観客たちから批難され、物議をかもししていた。『キャスリーン伯爵夫人』においては、飢饉で困窮している民のために、伯爵夫人がパンと引き替えに魂を引き渡す場面をめぐり、「プロテスタント的である」、とカトリックの怒りを誘発したのである。スティーヴンが静観する中、ユニヴァーシティ・コレッジの同級生たちが野次を飛ばしている(『若い芸術家の肖像』)。『谷間の陰』においては、老いた男と結婚した若い妻ノーラが、自由を求めて同じく若い放浪者と旅立つ場面をめぐり、アイランドの女性を誹謗していると批難された。『西国のプレーボーイ』では、父殺しを自慢する主人公クリスティ・マホンの行為とともに、シュミーズ姿の女性といった表現をめぐり、アイランドの美德を汚していると大騒動を起こした。

批難が沸き起こったのにはいくつかの理由がある。1801年の連合以来、アイランドの演劇も停滞していて、演劇とは何かを知る観客も少なかった。また作者の側も観客の質に対する理解を欠いていた。



ジョイスは、早くも 1901 年、「喧騒の時代」と題する論文で、アイルランド文芸劇場の地方性を批難してこう述べている。「今やアイルランド文芸劇場は、ヨーロッパで最も遅れをとっている民族の喧騒の徒により、ほしいままにされている、と見做さざるをえない」。しかし、イエイツたちが批難された最大の原因は、文学と政治の関わりの問題である。イエイツらは文学それ自体を目的とし、文学と政治を分離させていた。それに対して、民族主義者のアーサー・グリフィスや D. P. モーランたちは、文学を政治運動に奉仕すべき手段と考えていた。対立が起こったのも当然であった。

批難を受けたもう一つの理由は、イエイツたちが農民を素材にしたことである。イギリス人もこれまでアイルランド人を農民として表象してきたが、その典型的な農民像は、無知で、酒好きで、喧嘩好きで、饒舌な「豚飼いパディ」であった。イエイツたちはそのイメージを逆転させ、アイルランドの美德と才能を有する農民像を創造しようとしていた。だがそのような農民像が時代にそぐわなかっただけではない。アビー劇場の観客には農村出身者も多く、アイルランド人が農民として表象されることに嫌悪を感じる人もいたのである。「農民」という言葉は侮蔑的に思われたのだ。そもそも、アビー劇場の農民像は、現実と関わりのない「想像」の産物であった。

アビー劇場は 1910 年ころには経営不振に陥る。前途有望なシングが亡くなり、俳優のフェイ兄弟が去り、後援者のホーニマンに助成金を打切られたりもした。1924 年に自由国政府が助成を申し出て、英語圏世界で初めての国営劇場になった (Fallis) が、アイルランド文学ルネサンスも、制度的には 1920 年代に終息する。カトリックが覇権をにぎり、プロテスタントが周縁に押しやられたのである。イエイツたちの挫折をめぐり、ステイーヴンの「召使のひび割れ鏡」(1.146) という言葉が想起される。十八世紀のオリヴァー・ゴールドスミスやリチャード・シェリダンから、十九世紀のダイアン・ブーシコー、オスカー・ワイルド、G. B. ショーに至るアイルランドの文学者たちは、文壇で名を成すため、主人であるイギリスのご機嫌を取らねばならなかった。その立場は「宮廷道化師」(2.43) と同じである。イギリスに背を向けたイエイツたちにしても変わりはない。その反抗の対象としてイギリスの文化の存在を意識せざるをえなかったからである。宗主国の「われわれ」と「かれら」という力学を反転させただけであつたのだ。

## 文芸雑誌

それでもアイルランド文学ルネサンスはやはり大きな成果である。個々の作家の作品の完成度もさることながら、人々を連帯させる文芸雑誌の発刊もあった。雑誌『ダナ』の編纂もその一つであった。ケルト民族の母神であり豊穡の女神ダナにちなみ、「独自の思想」という副題を持つ。1904 年 5 月から 1905 年 4 月までに 12 冊を刊行した。ジョン・エグリントンとフレッド・ライアンが共同編集者であった。国立図書館で、エグリントンがラッセルに向かって、「われわれのものは読まれるようになるかな？ なるという気がするね。ゲール語同盟はアイルランド語で書いたものがほしいと言って来たし。今夜きみも来てくれるといいな。スターキーを連れておいでよ」(9.322) と語っていることから明らかなように、この雑誌は同時代の運動と呼応しながら、スターキーなどカトリックの若い世代の人々をも指導しよう

ともしていたのである。

その一方で、こうした運動から仲間はずれのスティーヴンは、わが身を『リア王』の娘コーディーリアに、さらにアイルランド伝説の海神リアの孤独な娘フィオヌアラになぞらえる。若手を応援しようとする、年長者たちの配慮を無視したためである。マリガンが「婆あがわざわざおまえに書かせてくれたのに、たわごとだっでんでこっぴどくやっつけやがる」(9.1160)と説諭しているように、スティーヴンはレイディ・グレゴリーの著書『詩人たちと夢想家たち』(1903)を冷淡に批評した。さらに彼はラッセルやライアンからの借金も返済していない(第二挿話)。こうしたスティーヴンの態度には、若きジョイスが色濃く投影されている。さらにジョイスは、新しい雑誌が出版されることを聞いて、『若い芸術家の肖像』の原型である自伝的なエッセイ、「芸術家の肖像」を『ダナ』に寄稿し、エグリントンから拒否されたこともある。

週刊新聞の『アイリッシュ・ホームステッド』も重要である。これは1895年から1930年(1923年からは『アイリッシュ・ステイツマン』に合併)まで刊行された、農業共同組合の機関誌である。農業共同組合はアイルランドの農業の近代化を目指し、1884年にホリス・ブランケットによって設立された非政治的な全国組織である。1904年には876もの支部を持ち、中流の農家の育成に努力した。その機関誌の編集者は神智学協会のメンバーであるH. F. ノーマンとジョージ・ラッセルであり、彼らは文芸復興運動の理念を多数の農民に伝播させていた。ジョイスも、1904年、この新聞に『ダブリンの市民』所収の「姉妹」、「イーヴリン」、「レースのあとで」を掲載してもらっている。

スティーヴンは、勤務先のデージー校長の手紙を『アイリッシュ・ホームステッド』に掲載してもらおうと、ラッセルに手渡ししながら、心の内で「豚どもの新聞」(9.321)と小馬鹿にしている。これは彼が農民を軽蔑しているからではない。レイディ・グレゴリーへの反発と同様の理由によるのだろう。現実との抵触を欠いた物語への嫌悪による。ジョイスも『アイリッシュ・ホームステッド』に三つの短篇を掲載した後、読者から不満の手紙があったとして、編集者のノーマンからこれ以上の投稿を断られた。その機関誌に掲載された文学者たちの現状維持の姿勢と対照的に、ジョイスの短篇は、中流の人々を捕えている「麻痺」をリアリスティックに描いていたためである。たとえば、その雑誌の1902年のクリスマス号に掲載された、K. F. パードンの「アーデヌーの見合い結婚」は、その女主人公の扱いにおいて、ジョイスの「イーヴリン」ときわだった対照をなしている。主人公の状況は同じであるにもかかわらず、前者がキティの忍従を美德にしているのに対して、後者はイーヴリンの自己実現を挫く要因を示唆している(Kelly)。

その他、ユニヴァーシティ・コレッジ・ダブリンの学内誌、あるいはオグレイディの『全アイルランド評論』紙、グリフィスの『ユナイテッド・アイリッシュマン』紙も重要である。とりわけ『ユナイテッド・アイリッシュマン』は、1899年から1906年まで刊行された週刊誌で、イギリスの影響を廃し、アイルランドの産業や文化の推進を促した。イエイツやラッセルが寄稿し、1904年にはアイルランドの独立の方策を説く、グリフィスの『ハンガリーの復活』が掲載された。そして1906年に『シン・フェイン』と改名され存続した。デニス・パトリック・モランが1900年に発行した『リーダー』もある。モラン

は偽善的な民族主義を「馬鹿な」(12.1239)と一蹴し、イギリス人、イギリス系アイルランド人、イギリス人かぶれをそれぞれ「青白い顔」,「西のブリトン人」,「インチキ紳士」(12.680)などと呼び、酒造業者を「ミスタ・バング」(12.281)などと非難した。

### 大陸の影響

民族主義運動が展開する一方、多くの文学者たちが、ヨーロッパの文学的動向にも敏感に反応した。その影響は彼らの言説に不可避に反映している。たとえば、第一挿話のマリガンは世紀末を演出しているように思える。彼の「はだけたままの黄いろいガウン」は『イエロー・ブック』などを連想させる世紀末の頹廢の色であるだろう。またボウルや鏡や剃刀などの髭剃の用具を使用してのミサ聖祭の模倣は、宗教に対する風刺であると同時に、ユイスマンスの『彼方』(1891)を彷彿させる黒ミサの仕草でもある。さらに彼の口をついて出るのは、ワイルド、スウィンバーン、ニーチェなど、世紀末の文学者や思想家たちの著作である。マリガンがこうした世紀末の言説に固定されているわけではない。それらはいくまで彼の知的装飾品にすぎないだろう。彼の言葉はその場かぎりである(第一挿話)。しかしマリガンが聡明な青年であることはさておき、アイルランドの青年が造作もなく時代の思想を吸収している事実は驚嘆に値する。

実際、時代の潮流への敏感な反応は、アイルランド文学ルネサンスに携わった指導者たちにも共通することである。イエイツ、シング、ムーアたちは、おしなべてイギリス、フランス、ドイツ、北欧、イタリア、ロシアといった国々の文学の息吹を吸収している。ジョイスもパリに出かけ、シングに、さらに亡命者のケヴィン・イーガンといった人物に会い、聖ジュヌヴィエーヴ図書館で美学の研究に打ち込んでいたと思われる。彼はジョージ・ムーアから、エドゥワール・デュジャルダンの『月桂樹は伐られた』(1887)の内的独白の手法についても、すでに聞かされていたらしい。同時にデュジャルダンの背景をなす、フランスのサンボリズム、あるいはワーグナーからの影響も受けたであろう。シングがイエイツから文学に転じる示唆を受けたのもパリであるし、イエイツが心を寄せる女性モード・ゴンの拠点もパリであった。

外国文学ということでは、ミスタ・ダッフィがドイツのゲルハート・ハウプトマン(1862-1945)の『ミチャエル・クラマー』(1900)の翻訳をしているし、またニーチェの超人思想の影響も受けている(「痛ましい事件」)。またステイーヴンがイプセンやその他の作家の影響を受け、心の内でダブリンの街にその情景を呼び覚ましている(『若い芸術家の肖像』)。これらはジョイスが大陸の思想に若いころから影響されていたことの反映である。だが、大陸からの影響ということでは、ジョイスにかぎられたことではない。アイルランド文学ルネサンスの作家たちは、アイルランド文学を開花させるため、いずれもロンドン、パリ、さらにヨーロッパ一般の文学や芸術に親しんでいたのである。アイルランド文学ルネサンスの精髓は、地域的でありながらも、普遍的な文学の創造にあった。

## 大衆雑誌・小説

にもかかわらず、このアイルランド文学ルネサンスの運動も、大衆にはそれほどの魅力はなかった。最大562人の客席を持つアビー劇場も四分の三は空席であった(O'Brien)。一般の市民たちはむしろパントマイムやサーカスなどの娯楽を楽しんでいた。そして読書も手軽な読み物が好まれた。イギリスから夥しい数の出版物が流入しており、「国籍剥脱化」が進行していたのである(Farmar)。

したがって、一般の人々の読書は娯楽のレベルを超えるものではない。ボイルンの秘書をしているミス・ダンがウィルキー・コリンズの『白い衣の女』(1860)を図書館から借り出して読んでいる(第十挿話)。またガーティは『プリンセス読物』、『レイディズ・ピクトーリアル』、『週刊ピアスン』といったロンドン発行の週刊誌、あるいはアメリカの作家マライア・カミンズの小説『点灯夫』(1854)、さらに新聞に掲載されたルイス・J.ウォルシュの詩などを読んでいる(第十三挿話)。

意外なのがブルームの妻モリーである。彼女はロンドン発行の『ジェントル・ウーマン』という週刊誌、およびブルームが借りてくる『サーカスの花ルービー』、『うるわしい暴君たち』、『モル・フランダーズ』(1722)を読み、フランソワ・ラブレールの『ガルガンチュアとパンタグリユエルの物語』(1490頃-1553)を知っているらしい。また彼女はミセス・ヘンリー・ウッドの『アシュリディアットの影』(1863)や『イースト・リン』(1861)、ウィルキー・コリンズの『月長石』(1868)、メアリ・エリザベス・ブラッドンの『ヘンリー・ダンバー』(1864)、エドワード・ブルワー＝リットンの『ユージーン・アラム』(1832)、マーガレット・ウルフ・ハンガーフォードの『モリー・ボーン』(1867)なども読んでいる(第十八挿話)。

一方、ブルームは若いころ詩作を試み(第十七挿話)、今また雑誌『ティットビッツ』の懸賞小説への応募、あるいは「内的独白」の手法を示唆するようなモリーの言葉の転写(第四挿話)を考え、さらにはスティーヴンと出会いを利用して『馭者溜り体験記』(第十六挿話)などを書こうとしている。それでも彼の読書もその幅が限られている。彼が好むのは科学的な本やポルノ的な雑誌の『フォート・ビッツ』ぐらいで、文学書もせいぜいコナン・ドイルの『スターク・マンロー書簡集』(1895)しか読んでいない。

一般の人々はほとんど大衆文学を超えることはなかった。しかもアイルランド人が手にする書物や雑誌のほとんどがイギリスから流入したものであった。スティーヴンやマリガンは特別なエリートである。スティーヴンが国立図書館でシェイクスピア論を語るが、その全貌についていけるのは、聞き手のうちでもマリガンやエグリントンぐらいではなかろうか。スティーヴンは異質の存在である。それでも、識字率も高まり、読書という営為により、海外の情報が容易に入手できたという事実は了解しておきたい。

## 子供の本

同じことは子供たちの状況にも当てはまる。少年たちは『ユニオン・ジャック』、『勇気』、『半ペニーの驚異』といった雑誌を読み、そこで語られているアメリカ西部のインディアンに倣った、戦争ごっこをしている。それぞれ1893年から1894年にかけて、ロンドンで、しかもダブリン出身の「チャベリゾッド生まれの三文新聞発行者ハームズワース」(7.733)によって刊行された。ベルヴェディア・コレッジの教

師であるらしいバトラー神父は、その一冊を生徒の一人が教室で読んでいるところを見つけ、「この学校のなかでは、二度とこういうくだらないものにお目にかかりたくない」と叱責するほど、子供たちに人気があった（「出会い」）。

ハームズワースの目的は、少年たちに良質の読物を提供することであった。バトラー神父の思惑とは異なっていた。だが、いずれにせよ、これらの物語はイギリスの一般の少年向けの雑誌である。それは、『ユニオン・ジャック』や『勇気』という表題にも明らかなように、大英帝国の使命を少年に鼓舞させようとするものである。言い換えるならば、アイルランドとかイギリスという区別なく、大人たちと同様、少年たちもイギリスの喧伝する文化を吸収しているということである。ジョイスの友人の C. P. カランもアメリカ西部の物語を読み耽けり、『少年自身の新聞』や『一ペニーの恐怖雑誌』などの愛好家であった。自伝『ダブリンが私を作った』において、やはり C. S. アンドルーズも同様の回想をしている。

雑誌以外に大衆小説の普及もあった。英国の小説家、ラドヤード・キップリングやライダー・ハガードの大英帝国を主題とした物語も、かなり読まれていたのではなかろうか。「出会い」や「アラビー」の少年はウォルター・スコット卿やリットン卿の小説を読んでいる。少年時代のスティーヴンも、宗教書や教科書の他に、アレグザンドル・デュマの『モンテ・クリスト伯』、テニソンやバイロンの詩集、ニューマンの散文なども読んでいる（『若い芸術家の肖像』）。

### スティーヴンのシェイクスピア論

このような状況を背景にスティーヴンのシェイクスピア論が語られる。場面は国立図書館の一室。聞き手はジョージ・ラッセル、ジョン・エグリントン、トマス・ウィリアム・リスター、リチャード・ベストといった実在の文学者。スティーヴンによると、『ハムレット』は家庭的な問題を劇化したもので、シェイクスピア自身はハムレット王に、妻アンはガートルード王妃に、息子ハムネットはハムレット王子に、二人の弟リチャードとエドモンドはハムレット王の弟クローディアスに、それぞれ投影されているという。スティーヴンの議論は、「シェイクスピアはハムレットだ」という「三百年の伝統」を覆すものである。そして彼はそうした独自の『ハムレット』論を基礎に、シェイクスピアの作品全般へと議論をさらに発展させている。

実は、スティーヴンのシェイクスピア像は、アイルランド文化への巧みな〈ハイジャック〉と思われる。アイルランド人は、事実、イギリスによる侵略をこれまで不義に見立ててきた。スティーヴンのシェイクスピア像は、そうしたアイルランド人の象徴となっている。妻の不義に苛まれるシェイクスピアは、王国を奪われたハムレット王であるだけでなく、マーテロ塔から追放されるスティーヴンであり、イギリスの支配下にあるアイルランド人である。そして彼はアイルランドを不貞な女に見立て、「わが眼前にて姦淫を行っている」（14369）と述べている。

スティーヴンのシェイクスピア像は、民族主義者が想い描くイメージとは正反対である。彼にはライバルとしての意識はない。それはスティーヴンのシェイクスピア像が、彼の内面の鏡像であることによる。スティーヴンの議論が自嘲的に思われるのも、シェイクスピアの中に「自分のことを書いた本」（9.114）

を読み取っているためである。彼のシェイクスピア論は、自己を規定している民族主義、帝国主義、カトリック教会といった、アイルランドの「大きな物語」を批判する装置である。「自分の説を信じているのかい？」(9.1065)とエグリントンに問われ、即座に「いいえ」と否定するのはそのためである。ステイーヴンにとってシェイクスピアは、「英」文学の偉大な作家の一人にすぎなかったであらう。彼の念頭にあったのは、作者ジョイスと同じく、国家という境界を超えた大きな文化であった。ブルーム夫婦の家庭劇はその問題を示唆している。

#### 参考文献

- Andrews, C. S. *Dublin Made Me: An Autobiography*. Dublin: Mercier Press, 1979.
- Bennet, Douglas. *Encyclopedia of Dublin*. Dublin: Gill and Macmillan, 1991.
- Cairns, David and Shun Richards. "Woman' in the Discourse of Celticism: A Reading of *The Shadow of the Glen*." *Canadian Journal of Irish Studies*, vol. 13, no. 1, 1987.
- Collins, M. E. *Ireland, 1868-1966: History in the Making*. Dublin: Educational Company, 1993.
- Costello, Peter. *The Heart Grown Brutal: The Irish Revolution in Literature, from Parnell to the Death of Yeats, 1891-1939*. Dublin: Gill and Macmillan, 1977.
- Coxhead, Elizabeth. *Daughters of Erin: Five Women of the Irish Renaissance*. London: Secker and Warburg, 1965.
- Curran, C. P. *Under the Receding Waves*. Dublin: Gillard and Macmillan, 1970.
- Deane, Seamus. *Celtic Revivals: Essays in Modern Irish Literature 1880-1980*. London and Boston: Faber and Faber, 1985.
- Fairhall, James. *James Joyce and the Question of History*. New York: Cambridge University Press, 1993.
- Fallis, Richard. *The Irish Renaissance*. New York: Syracuse University Press, 1977.
- Farmar, Tony. *Ordinary Lives: the private lives of three generations of Ireland's professional classes*. Dublin: A & A Farmar, 1995.
- Foster, John Wilson. *Fictions of the Irish Literary Revival: A Changeling Art*. New York: Syracuse University Press, 1987.
- Herr, Cheryl. *Joyce's Anatomy of Culture*. Urbana: University of Illinois Press, 1986.
- Hirsch, Edward. "The Imaginary Irish Peasants." *PMLA*, vol. 106, no. 5, 1991.
- Howarth, Herbert. *The Irish Writers 1880-1940: Literature under Parnell's Star*. London: Rockliff, 1958.
- Hutchinson, John. *The Dynamics of Cultural Nationalism: The Gaelic Revival and the Creation of the Irish Nation State*. London: Allen & Unwin, 1987.
- Innes, C. L. *Women and Nation in Irish Literature and Society, 1880-1935*. Hertfordshire: Harvester Wheatsheaf, 1993.
- Kelly, Joseph. *Our Joyce: From Outcast to Icon*. Austin: University of Texas Press, 1998.
- Lyons, F. S. L. *Culture and Anarchy in Ireland, 1890-1939*. Oxford: Oxford University Press, 1979.
- . *Ireland Since the Famine*. London: Fontana, 1973.
- McBride, Lawrence W., ed. *Images, Icons and the Irish Nationalist Imagination*. Dublin: Four Court Press, 1999.
- O'Brien, Joseph V. "Dear Dirty Dublin": *A City in Distress*. Berkeley: University of California Press, 1982.
- O'Connor, Ulick. *All the Olympians: A Biographical Portrait of the Irish Literary Renaissance*. New York: Henry Holt, 1984.
- Watson, George Joseph. *Irish Identity and the Literary Revival: Synge, Yeats, Joyce and O'Casey*. London: Groom Helm, 1979.